



命を与えてくれたチューー

〈神奈川県〉 柏木 かしわぎ 澄江 すみえ 65歳

昨年の4月30日に、父が93歳で天国に旅立ちました。

父は戦時中、陸軍将校として戦地に赴いた厳格で頑固な人でした。気丈な父も母に2年前に病気で先立たれてから、表情も気力も目に見えて低下していきました。訪問看護師さんやヘルパーさんのお世話になりながら、一人でがんばってはいたのですが、だんだんとベッドにいる時間も長くなり、ついには肺炎を起こして入院ということになりました。

入院してからは、凛とした面影はなく、点滴のチューブが何本もつながり、手にはミトンを装着された父の姿でした。私たちが声を掛けても反応が薄く、その姿にとてもショックを受けました。

それは、4月1日の父の93歳の誕生日のことでした。誕生日のお祝いをしよ

うと、私は花を持って病院に行きました。しかし、話し掛けても父に反応はなく、思わず涙がこぼれてきました。

夕刻になって、以前からお世話になっていた、訪問看護師ステーションの看護師さんたちが訪ねて来てくださりました。HCU(高度治療室)にもかかわらず、父の耳元で小さな声で「ハッピーバースデー」の歌を歌ってください、「誕生日プレゼントよ」と言いながら、皆さんが代わる代わる、父のほっぺにチューーをしてくださったのです。

その「チューー」が奇跡を起こしてくれました。父の消えかけていた「命のともしび」を、もう一度燃え上がらせてくれたのです。そのチューーで、パッと生きる力を呼び覚まされたのでしよう。次の日に遠方から見舞いにき

た長男や次女や孫一人一人の名前もはつきりと分かるようになり、元気だったころの父の片鱗が復活したのです。孫たちは「看護師さんたちのチューーの威力はすごいなあ」と驚いていました。

私は、この時ほど看護師さんたちの患者を思いやる力のすごさを感じたことはありません。まさに「生きる力を引き出す看護」を目の当たりにした思いでした。

最期まで、父を患者としてではなく、一人の人間として接してくださった、訪問看護師さんたち。父も幸せな気持ちで旅立てたと、心から感謝しています。

